

闘病励ます チェロの音

乳がんと闘い、この11月に49歳で亡くなった大分県豊後高田市の元養護教諭、山田泉さんと、パリ在住の男性チェリストとの交流を描いたドキュメンタリー映画が今月から全国で公開される。限られた命を精いっぱい生きようとした姿は、見る人の心を打つ。

タイトルは「ご縁玉～仮から大分へ」。国際的に活躍するチェリスト、エリックマリア・クチュウリエさん（36）が、5円玉を握りしめ、単身、日本へ向かう場面から映画は始まる。抗がん剤治療などを続けていた山田さんを訪ね、チェロの音色で励まそうというのが目的だ。

中学校の養護教諭だった山田さんは、2000年2月に乳がんを発症。休職して手術や治療を行った後は復職し、「いのちの授業」に取り組んできた。しかし、05年11月に再発。07年5月に転移が見つかった。

「今のうちに好きなことをしたほうがいい」。医師に助言され、9月、パリを旅した。その時、知りあったのがクチュウリエさんだった。「御縁がありますように」。帰国前、5円玉を手渡したのがきっかけで、3ヶ月後、本当にクチュウリエさんは日本にやってくる。

言葉はほとんど通じないが、山田さん一家と一緒に食事をしたり、チェロを弾いたり。山田さんが入院していた病院や養護施設でのミニコンサートなど、様々な「出会い」を通じて、生きることの喜びや人とのつながりのすばらしさを優しく描き出している。

ベトナムの戦災孤児だったクチュウリエさんもまた、養母を乳がんで亡くしており、「何もしてあげられなかった」という後悔の念を抱え続けていた。

「国や言葉、年齢を超え、距離を縮めていく2人の姿からは、人を思いやる優しさを感じます。今の時代、忘れられつつある思いやりの心を思い出してほしい」と配給会社パンドラ（東京）の

松田高加子さんは話している。

12日から山口情報芸術センター（山口市）、佐賀、東京、福岡、名古屋、大阪など全国で
順次公開予定。